

アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドのプロフィール

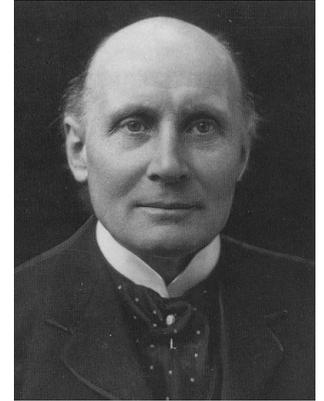
パウロ眞野玄範

このレポートは、『宗教の形成』、『過程と実在』、小自伝^[1]、J J O'Connor&E F Robertson^[2]、Norman Pittenger^[3]、Wikipedia 英語版などを参考に、A.N. ホワイトヘッドの伝記的および思想的なプロフィールをまとめたものである。

1. 伝記的プロフィール

1861年2月15日、英国ケント州タネット島のラムスゲイトに生まれる。10歳からラテン語を、12歳からギリシア語を父から学び、古典に親しむ。

1880年、ケンブリッジのトリニティ・カレッジに入学。数学を専攻して1884年に学位(BA)取得。ケンブリッジ大学では各々の専攻の領域の講義しか受けないが、毎日夕食時から3～4時間にわたって様々な専攻の学生が混ざって議論を交わす習わしがあり、また毎土曜日には夜10時から翌朝まで同様なより密度の濃い交わりを1820年代にテニスンが始めた「使徒クラブ」で持っていた。ホワイトヘッドの哲学を含む幅広い素養はそこで養われた。カントの『純粋理性批判』の相当な箇所を暗唱できるほど読み込んでいたという。ちなみに19世紀後半のケンブリッジではヘーゲル主義が隆盛で、バートランド・ラッセルも初期にはヘーゲリアンであったというが、ホワイトヘッドはヘーゲルが数学について論じているところから読み始めたところ、全くのナンセンスとしか思えず(愚かにも、と小自伝では言い足しているが)、それ以上は読めなかったと述べている。



1885年、トリニティ・カレッジのフェローになり、数学と数理物理学を教える職を与えられる。

1890年、Evelyn Willoughby Wade と結婚、3人の子をなす。ホワイトヘッドは、自らの思想に妻が美学的転回を与えたと自伝で述べている。

1903年、『普遍代数学』を認められ、英国王立協会のメンバーに加えられる。

教え子にバートランド・ラッセル^[4]がおり、1900年代に『数学原理』(1910)を共著した(ラッセルは1903年に彼の『数学原理 I』を出版していたので、双方にとっての「第二巻」だった)。ただし、ホワイトヘッドはラッセルの平和主義者としての活動を、ラッセルはホワイトヘッドの形而上学への志向を、まじめに取り合えるようなものと考えず、そうした関心の違いから第一次世界大戦に入る頃から関係が疎遠になっている。

[1] A.N.Whitehead's Autobiographical Notes (published in 1941 in Volume III of The Library of Living Philosophers edited by P A Schilpp) http://www-groups.dcs.st-and.ac.uk/~history/Extras/Whitehead_Autobiography.html ※『宗教の形成』の後書きに訳がある。

[2] <http://www-groups.dcs.st-and.ac.uk/~history/Biographies/Whitehead.html>

[3] "Alfred North Whitehead", Norman Pittenger, 1969, John Knox Press ※ <http://www.religion-online.org/showbook.asp?title=2212>

[4] バートランド・アーサー・ウィリアム・ラッセル (Bertrand Arthur William Russell, OM, FRS 1872年5月18日 - 1970年2月2日) : アルベルト・アインシュタインと親交があり、共に核廃絶を訴える「ラッセル＝アインシュタイン宣言」を発表した。ウィットゲンシュタインの才能を早くに見抜き、親交を結ぶとともに、『論理哲学論考』の出版などを支援した。数学者・論理学者として出発し、哲学者としてヘーゲリアンから経験論者に転向、以後その主張はかなりぶれがあったものの基本的にはモノの対象を基礎とした現象主義もしくは随伴主義的唯物論をとる。ヘーゲルの影響を逃れた直後の著作である『数学原理』(1903年)では、多数の普遍的存在者を容認する極端な普遍実在論を展開したが、『表示について』(1905年)で普遍者とみられたものが個物についての記述の連言として分析できることを発見したことをきっかけにして、『論理的原子論の哲学』では、個物のみを実在とし、以後はその個物が何であるか、とくに心と個物の関係が何であるかに関心の中心が向けられた。神の不可知論を提唱する点で、無神論である。「自由人の信仰」や「わたしはなぜキリスト教徒ではないか」などで、宗教の基礎を、死や神秘的なものへの恐怖にあるとした。リチャード・ドーキンスは「神は妄想である」においてラッセルの宗教的教義への反駁を多数参照している。(以上、wikipediaから)ホワイトヘッドとの密接な交わりがあったのは1898-1912年の間。

1911年、職の当てのないままにロンドンに移る。1911～1914年にユニバーシティ・カレッジ・ロンドンで講師を務めた後、1914～1924年はケンジントンのインペリアル・カレッジで教授職についた。

この時期までの主な著作は以下の通り：

『普遍代数学』(1898)

※ ヘルマン・グラスマンの『延長論』、ライプニッツの『普遍記号学』の構想、ジョージ・ブールの著作等が基礎。

『初期数学論集』(『射影幾何学の公理』(1906)、『画法幾何学の公理』(1907)、『物質世界の数学的概念』(1906))

※ 『物質世界の数学的概念』は自然哲学への移行を示している。ラッセルの『ライプニッツ哲学の批判的解説』の強い影響が見られるという。

『数学原理』(1910, 1912, 1913) ※ラッセルとの共著

『数学入門』(1911)

1918年、哲学の著作に取り組み始める。ロンドン・アリストテレス協会が、そのための議論の場であった。アインシュタインの一般相対性理論(1915-16)から受けた衝撃が科学哲学への動機を与えたようである。

『自然認識の諸原理』(1919) ※ WW I で戦死した末子エリックに献げられた。

『自然という概念』(1920)

1922年、アインシュタインの理論の代替仮説として『相対性原理』を著している(後にアインシュタインの方が正しいことが実証された)。

1924年、米国のハーバード大学に哲学の教授として招かれた(63歳)。午前中に講義、午後は自宅を開放して学生と話をする時間にしていたという。講義はあらかじめ体系的に整理された内容の論述ではなく、講義の中で学生との応答の中でリアルタイムに内容を展開していくようなスタイルだったという。1937年に退官。

『科学と近代世界』(1925) ※ここで使われた考え方が次の著書で宗教に応用されている。

『宗教の形成』(1926)^[5]

『理性の機能・象徴作用』(1927, 1929)

『教育の目的』(1929)

『過程と実在』(1929) ※ 1927-28年にエジンバラ大学で行った講義録

『観念の冒険』(1933)

『思考の諸様態』(1938)

『科学・哲学論集』(1947)

1947年12月30日、米国マサチューセッツ州ケンブリッジで死去。本人の遺志によって遺族によって全てのノートが廃棄されたため、ホワイトヘッドの著作の批判校訂版はない。

[5] "Religion in the Making" が原題。直訳すれば『形成途上の宗教』になるが、邦訳では、1967年版では『宗教の形成』、現行の1986年版では『宗教とその形成』になっている。このレポートでは邦題と頁を、参照した1967年版で統一した。頁は+16頁で現行版に対応する。

2. 信仰者としてのプロフィール

父や叔父たちが英国教会の司祭という環境でアングリカンとして育った。弟のヘンリー・ホワイトヘッド (1863-1947) は英国教会で司祭按手を受け、後にマドラスの主教になっている。ケンブリッジの学生時代はハイチャーチの教会でほとんど欠かさずに礼拝を守っていた。外国宣教にも関心を示していた。

1889-90年頃、ジョン・ヘンリー・ニューマン^[6]やパリ育ちのアイルランド人の妻の影響を受け、ローマ・カトリックに傾斜した。おそらくニューマンの『キリスト教教理の発展』(1844)^[7]等から学んだものと思われる。それは「生物的色彩にあふれ、成長の概念の偉大なる洞察を伴った分析」^[8]であった。

「宗教改革は、歴史上の壮大な過ちの一つでした。それは、教会を寛容にし、慈悲深くさえさせるものを船外に捨てました。すなわち、感性的な魅力を。他方で野蛮な神学は維持したのです。」^[9]

「宗教改革は歴史的災厄の一つであったように私には思われます。もっと時間があつたなら、(ローマ・カトリック)教会は内部から改革されていたでしょう。エラスムスはおよそ正しい考えを持っていましたし、死ぬ前に枢機卿の座に着くよう申し入れを受けていたのです。彼は断ったのですが。しかし、プロテスタントの反乱は教会の抵抗をかたくななものにし、プロテスタントは、教会の、まさにそれを慈悲深く寛容にするところのものを、投げ捨てたのです。すなわち、感性的、感情的な魅力を。今日のクリスチャンの中から選ぶとしたら、私はユニテリアンを選ぶでしょう。彼らももっと影響力を持っていたらよいのですが。私が理解するところでは、彼らは会衆派に近いのだと思います。もっと近くなればよいと思います。というのも、次の百年間で、合衆国でカトリックが支配的になったとしても不思議でないと思うからです。」^[10]

約7年間にわたって改宗するかどうか悩んだ結果(この時期に神学に強い関心を寄せた)、戦闘的な不可知論(Agnosticism)^[11]の立場を取るようになり、教会から離れた。ホワイトヘッドは、その最大の理由に自然科学の急速な発展を挙げ、特にそれに照らしてニュートン物理学が誤っていたと考えるようになったためであるとしている。

1918年3月、末子が戦死したことが、宗教への関心を回復させ、哲学へのモチーフを与えた、と言われる。^[12]

米国では、晩年にハーバード大学のメモリアル・チャーチ(1932年設立)の礼拝に時折出るようになるまでは近くの教会の礼拝に出ていたということである。ただし、教会に所属することはなかった。

※『科学と近代世界』(1925)および『宗教の形成』(1926)は、ボストンのキングズ・チャペル^[13]での講義のために執筆された。この教会は、1785年以来、ユニテリアンの神学に立ち、聖公会の祈祷書によって礼拝を行い、会衆派の教会運営を行っている。『宗教の形成』には、「教会は神の教説に関して、次第にセム族的概念に戻り、それに三位の位格を付加した。それは明晰な、恐ろしい、かつ証明不可能な概念である」という一節があるが、それはこの北米最古のユニテリアン教会に敬意を表して述べたのかもしれない。

1947年に死去した際は本人の遺志で葬儀は行われず、遺体は火葬にされ、メモリアル・チャーチの墓地に埋葬された(墓石等はない)。

[6] ニューマンはこの著作の論理的帰結として英国教会からローマ・カトリックに改宗した。ただし、契機となったのは、エルサレム主教座「回復」の企てなどの当時の英国教会の状況である。

[7] <http://www.newmanreader.org/works/development/index.html>

[8] "English Thought 1860-1900 - The Theological Aspect", L. E. Elliot Binns, 1956

[9] "Dialogues of Alfred North Whitehead", Lucien Price, 1954, p.286 ※試訳。これは晩年の会話の記録。

[10] 同上, p.306

[11] Agnosticism (不可知論): 1869年にThomas Henry Huxleyが自らの立場を表すのに使い始めた用語。Atheism (無神論)のような否定的ニュアンスはなく、究極の真理は人知を越えているという理解を意味し、信条ではなく方法であるとされた。

[12] Victor Lowe, "The Approach to Metaphysics", "The Relevance of Whitehead"(1961) 所収, p.204

[13] キングズ・チャペルは1686年に英国教会の教会として創立されたが、1785年に聖公会から離れてユニテリアン教会として再出発した。礼拝で使っている聖公会の式文(Book of Common Prayer)からは伝統的信条が除かれ、代わりに「真理の愛とイエス・キリストの精神において、我々は神の礼拝と人の奉仕のために結合する」という契約を用いている。※ <http://www.kings-chapel.org/>

3. ホワイトヘッドの残した思想的影響

ウィリアム・クリスチャンとアイヴァー・レクラークによって最初のホワイトヘッド入門書が書かれたのは1950年代のこと。公式な伝記作者ヴィクター・ローの著書によって1960年代にホワイトヘッドは知られるようになった。^[14]

○ 英国

英国に残した最も重要な影響は、エヴリン・アンダーヒル（1875-1941）を通したのではないだろうか。英国教会や米国聖公会の教会暦で6月15日に記念されているエヴリン・アンダーヒルは、ホワイトヘッドの哲学の影響を受けて、その聖霊論を形成した。霊性についてのアングロ・カトリシズムの先駆的神学者である彼女の思想は、ベルクソンの影響を受けた生気論的な神秘主義理解の段階、第一次世界大戦や夫の逝去によって楽観的な進化論的傾きの見直しを余儀なくされてカトリック思想家のフリードリッヒ・フォン・ヒューゲル（1852-1925）の影響を受けたキリスト論的に展開した段階を経て、キリストのただ一回的な受肉ではなく聖霊の持続的な受肉に基礎をおく神学に結実した。この第三段階への転回に決定的な影響を与えたのが、聖霊を強調する東方教会の神学およびホワイトヘッドの哲学であった。「聖霊」は、キリストの聖霊ではなく神の聖霊であって、キリストは聖霊の完全なる受肉であると理解され、聖霊は聖霊の動的なエネルギーとの接触であって、キリストの静的な臨在との接触ではないと理解される。こうした聖霊論、典礼論は、20世紀後半になって回復されるようになった理解の先鞭を付けるものであった。^[15]

ケンブリッジ大学のG.E. ムーア、C.D. ブロード、オックスフォード大学のR.G. コリングウッド、サミュエル・アレクサンダーらの哲学者が、1920年代にホワイトヘッドの自然哲学がもつ重要性を意識していたという。しかし、ハーヴァード大学へ移った後は、ホワイトヘッドは母国では忘れられたも同然であった。

スコットランドでは、システム生物学の基礎を築いたコンラッド・ウォディントン^[16]（1905-1975、エジンバラ大学）が、1920～30年代にホワイトヘッドの哲学から学んだことが知られている。

○ フランス

メルロ＝ポンティ（1908-1961）は、ホワイトヘッドの自然哲学に刺激を受け、講義で取り上げていたことが知られている。

ジル・ドゥルーズ（1925-1995）が『差異と反復』^[17]で言及し、『褻』^[18]で論じている。ホワイトヘッドを学ぶ人の中には、ドゥルーズの思想はホワイトヘッドの思想そのものだとまで言う人もいる。ちなみに、ホワイトヘッドもドゥルーズもアンリ・ベルクソン（1859-1941）を経由することで自らの思想を形成しており、ホワイトヘッドの宗教哲学はヒュームの『自然宗教に関する対話』への「参加」^[19]であり、ドゥルーズもヒュームに取り組んでいるので、関心だけでなく道具立ても含めて近似していることに不思議はない。

「私は〈事件〉の概念について書くことに時間を費やしてきたわけですが、それは私が事物の存在を信じていないからにほかなりません。そして『褻』のねらいは〈事件〉の問題をもう一度取り上げて別の方面に発展させることにありました。…ライブニッツでも、ホワイトヘッドでも、すべてが〈事件〉として捉えられている。ライブニッツが述辞と呼んだものは、決して属性などではなく、「ルビコン川を渡る」と同等の、まぎれもない〈事件〉なのです。だから、彼らは主辞の概念を根底から修正せざるを得なかった。述辞が〈事件〉であ

[14] <http://www2.biglobe.ne.jp/~shoron/wh.htm>

[15] http://www.evelynunderhill.org/her_work/articles/johnson1.shtml

[16] Conrad Hal Waddington: ケンブリッジ大学クライスト・カレッジ卒。生物学、古生物学、遺伝学、発生学、哲学で業績を残した。

[17] 『差異と反復』第三版、河出書房新社、p.422で『過程と実在』を「現代哲学のもっとも偉大な書物の一つ」と述べている。

[18] <http://www.geocities.jp/hakutoshu/processlog1.html>

[19] 『過程と実在』第5部第2章第2節で自身が使っている表現

るならば、主辞（主体）は何であるべきか、と問うしかなかったのです。^[20]」

○ 米国

同時代人のジョージ・ハーバート・ミード (1863-1931) には、その後期の社会哲学に「パースペクティヴの客観性」という観点を与えた。ハーバード大学時代の同僚・教え子に、W.V. クワイン (1908-2000) や D. デイヴィッドソン (1917-2003) がいる。当時の影響力は、主に大学のグループ内に限定されていた。リチャード・ローティ (1931-2007) はハーツホーンからホワイトヘッド哲学を学んでいる。

ハーバード大学でホワイトヘッドの助手であったチャールズ・ハーツホーン (1897-2000)^[21] は、ホワイトヘッドの哲学を継承し、その神論が「プロセス神学」の端緒となった。プロセス神学は、ハーツホーンのほか、シカゴ大学でハーツホーンから学んだジョン・B・カブ Jr.(1925-)、クレアモント大学でカブから学んだデイヴィッド・グリフィン (1939-)、マージョリー・スコッキ (1933-) 等が主な担い手となって 1960 年代から運動としての展開を見て、フィリップ・クレイトン (1955-) 等に引き継がれ、新正統主義が勢いを失ってリベラル神学への回帰が起こる中で影響を広げてきた。クレアモント大学に、カブ、グリフィンらによって、プロセス神学・プロセス哲学を研究する国際的な中心機関として、Center for Process Studies (CPS)^[22] が設置され、学会誌 "Process Studies" が発行されている。1990 年代に入る頃には韓国や中国に伝える努力がなされていた。また、シカゴ学派とは別に、ジェネラル神学校のノーマン・ピッテンジャーがアングロ・カソリズムのリベラル神学の文脈で「プロセス神学」を展開した (1959 年に受肉論を出版)。なお、リベラル神学は、信仰者には世俗的に過ぎ、世俗主義者には宗教的に過ぎ、神学者でない者には学問的過ぎると言われるが、プロセス神学はその典型であると評される。教会への影響力は極めて限定的なようである。^[23]

1970 年代に始まる自然科学者たちによる新しい世界像の探求で、しばしばホワイトヘッドの有機体論的自然概念が参照されてきた。生物学者の W.H. ソープ、ジョゼフ・ニーダム、グレゴリー・ベイトソン、物理学者のデイヴィッド・ボーム、生化学者のイリヤ・プリゴジン (『自然との対話』1984 邦訳『混沌からの秩序』みすず書房) 等が挙げられる。

○ ドイツ

フランクフルト学派のヘルベルト・マルクーゼやテオドール・アドルノが参照している。1960 年代に多くの学生に読まれたマルクーゼの『一次元的人間』の「大いなる拒否」という概念は、ホワイトヘッドの『科学と近代世界』の「大いなる拒否 (The Great Refusal)」を美学的 - 政治的な領域に移し換えたもの。アドルノは、死後発刊された『美学論』で「芸術のプロセス的性格」について語っている。

ユルゲン・ハーバーマスは、その「啓蒙」のビジョンがホワイトヘッドの宇宙論のビジョンに近似していること、またその議論はしばしばホワイトヘッドに見ることができるものだと指摘されている。「ポスト形而上学」を標榜しているにも関わらず、そのように言われるのは、ハーバーマスがジョージ・ハーバート・ミードの社会理論の受容を通して間接的に影響を受けているためであろう。『社会化による個性化 - ジョージ・ハーバート・ミードの主体性理論』(1988) でも、引用しているミードの言葉は、ミードがホワイトヘッドの言葉を引きながら論じている箇所である:「各個人は、万人に共通な共同社会の生における出来事を、他のどの個人の局面からも区別されるひとつの局面で分節する。ホワイトヘッドの言葉を使って表現するなら、各個人は共同の生を異なる仕方でも積み重ねるのであり、共同社会の生はこれらすべての分節の総計なのである。」^[24]

[20] 『記号と事件 1972-1990 年の対話』, ジル・ドゥルーズ, 1990, 邦訳 (河出文庫版) p.324-325

[21] Charles Hartshorne の祖父、父は、聖公会司祭。哲学が本職。ホワイトヘッドのほか、Matthew Arnold, Charles Sanders Peirce, William Ernest Hocking 等の思想的影響を受けた。ユニテリアン・ユニヴァーサリスト教会に属した。

[22] CPS のホームページ <http://www.ctr4process.org/>

[23] <http://www.crosscurrents.org/dorrien200506.htm>

[24] 『ポスト形而上学の思想』, p.280

○日本

西田幾多郎の哲学、空海の仏教概念との比較や対話が盛んに試みられている。「日本ホワイトヘッド・プロセス学会」^[25]があり、学会誌「プロセス思想」が発行されている（※ 理事に、間瀬啓允、延原時行、村田康常が入っている）。

4. ホワイトヘッドの哲学へのアプローチ

ホワイトヘッドは、「同じ川に二度入ることはできない」というヘラクレイトス^[26]の言葉に示されている「絶え間ない変化」を核とする形而上学^[27]を構想した。プラトンの『ティマイオス』を現代的に書き直したものと見ることができる。

ホワイトヘッドの哲学の構えは、次の言葉によく表れている：

「ある時代の哲学を批判するとき、その論者たちが明示的に擁護する必要を感じていた知的立場に主たる注意を向けてはならない。その時代の全ての思想体系の信奉者たちが無意識的に仮定していた幾つかの根本的な前提があるはずである。そうした前提はあまりにも自明に思われ、他に理解する仕方を考えたこともないために、人々は何を前提にしているのか知らないのだ。そうした諸前提の上に、ある限られた数の哲学体系の型が可能なのであり、このグループがその時代の哲学を構成するのである。」（『科学と近代世界』）

ホワイトヘッドの哲学の戦略は、マイケル・ウェーバー^[28]がよく描き出している：

「ホワイトヘッドの哲学の発展は、それが連続的なものだったとして、その哲学的特性の主要な特徴の観点から解釈されるべきである。彼が常とした哲学的見解は、次の三つの方法において描くことができる。

第一に、誘因^{lure}もしくは洞察^{vision}。ホワイトヘッドは、「単純で自明な文」の意味を問い、より高次の抽象の理法に達するために一般概念を再組織するという、考古学的な（基礎的な）欲求によって常に動かされていた。

第二に、この誘因は、狙いを定めた目的（数学、存在論、…）に応じて彼が提案する言葉の限界についての鋭く批判的な自覚によって抑制される^[29]。手短かに言えば、ホワイトヘッドは、直観の弱さと言葉の欠陥を遺憾に思うだけでなく、関係する主要な誤謬（独断的誤謬、完全辞書の誤謬、置き違いの誤謬）を識別し、印欧語の文法の問題を告発し、そして殊に、主語／述語のパターンの実体論的解釈を非難することに熱心なのである。この「破壊的」運動は、「建設的」運動によって補完される。ホワイトヘッドは、日常言語、哲学言語を、「市場における共通の意味」を超えて意味論的限界まで引き延ばして用い、必要なときには躊躇せずに全くの新しい範疇を指す語をつくりだす。

第三に、この洞察は、二つの要素からなる緊張によって育てられる。ラディカルな経験主義の方に向けて（基本的には、相関する出来事の多元的共存）、そして完全な形式主義の方に向けて（様々な装いを取ったが、数学関数の概念とその拡張は依然として重要であり続けた。）

ホワイトヘッドが批判の対象としたのは、アリストテレスの形而上学とその「実体」概念である。「実体」を「現実

[25] 日本ホワイトヘッド・プロセス学会のホームページ <http://www.nebuta.ac.jp/myoshi/01top.html>

[26] エフェソのヘラクレイトス (c.535-c.475 BCE)：ソクラテス以前のギリシアの哲学者。著書といわれる『自然について』は現存せず、引用によってのみ断片が伝わる。

[27] ホワイトヘッドが「形而上学」という言葉を使うとき、それは「生起するあらゆるものの分析に不可欠な関わりを持つ普遍的観念の発見を目指す科学のこと」である。（『宗教の形成』 p.76, 80）

[28] Michael Weber, "Whitehead's Pancreativism - The Basics", 2006, p.4 ※ 試訳

[29] これを分かりやすく言えば、「ホワイトヘッドは過剰な哲学が大嫌いだった。“ちょうどそのぶんだけの思索”をすることをもって、それを組み合わせしていく哲学がありうることを、生涯をかけて表示しつづけた」（松岡正剛）ということになる。

的実質／契機」という概念に替え、全てを過程の中にある出来事として捉え直していく。また、存在するために自己自身のほかに何も必要としない実体はなく、全ての実在者はその本質において社会的であり、それが存在するためには社会を必要とする、と見る。この議論は、デカルトとニュートンによって機械論的に構想された自然概念、精神と物体の二元論の批判として展開された。ホワイトヘッドの宇宙には、ただ法則性（「拘束」）によって結びつけられる「関係の組織」だけが存在する。それは特定の関係として個別化される可能性をもつが、同時に、それは自然の全体的な脈絡の中に埋め込まれている。これが「機械論的自然観」に替えて提起される「有機体論的自然観」である。ホワイトヘッドの宇宙論において、世界は絶え間なく更新が可能な開かれたものであり、従って創造的である。世界の原初的（^{primordial} 原理的）本性は「流れ」である。世界の原初的与件は「永続性」であって、これは神の本性である。創造が「不滅性」という最終項に到達した時＝「世界の神化」に達した時、創造は「永続性」と「流れ」の和解を達成する。

この宇宙論が楽観説であると評されることがある。例えば、塚田理が『プロセス神学とその課題』（1976）で、ホワイトヘッドの哲学の特徴として六点を挙げる中で、次のように述べている。

「第三の特徴は、この宇宙的運動 - < 動態的過程 > - を< 創造的過程 > と見なし、あらゆる実体は不断に死滅しつつ、同日に常に、新しい実体を創造する過程として見ることである。これは、一種の宇宙的進歩（進化）という楽観説であると言ってもよいであろう。このような観点からすれば、この世における悪は、より良き善へ向かっての創造的運動の中で死滅し、新しい価値の創造の素材として活用されるのである。罪とは、このような新しい価値の創造へ向けての運動に参加すること - それはあらゆる存在の存在理由であり、また責任であるのだが - を拒絶することであるということが出来る。」^[30]

ホワイトヘッドが破壊した「実体」概念を安易に使うことで論述していることが目につくが、問題は、ホワイトヘッドの哲学的な企図を、真逆に受け取るのに等しい結果になっていることである。ホワイトヘッドの破壊的な企図を理解せずに建設的側面の表面をなぞるだけだから誤解するのだろう（後述するティリッヒによる批判は、まさにこのような誤解において受容されたホワイトヘッドを対象にしたと考えられる）。ホワイトヘッドは、世界の全てについて、自然科学的概念によってであれ、宗教的観念によってであれ、出来事性を捨象して、その概念の鏡に映るものだけをもって捉えたつもりになることを批判してやまず（＝破壊的側面）、それに代わる捉え方の体系を追究したのである（建設的側面）。それゆえ、悪の問題については次のように指摘するのだ。

「いかなる宗教も、事実に直面するや、この世の悪を、たんに道徳的悪だけでなく苦痛や悩みをも含めて過小評価することはできない。」^[31]（邦訳で「事実」と訳されている "fact" とは、実在的「出来事」のこと）

また、このことのゆえに、キリスト教を高く評価するのである。

「悪の取り扱いに関して、キリスト教は形而上学的概念の点で（仏教に比べて）より不明瞭であるが、事実をより多く含んでいる。第一に、キリスト教は悪を世界全体を通じて固有なものと認める。しかし、この宗教の主張によれば、このような悪は個々の人間が犯す罪の事実そのものの必然的結果ではない。キリスト教は悪を現実的推移の出来事の中での偶然的な事実から引き出すのであり、したがって、現実的なものの面から理解できるものとしてのある理想的なものに余地を残している。」^[32]

ホワイトヘッドの宇宙論が根本的に肯定的であるという意味において、それは楽観的であると言うことはできよう。しかし、同様に、キリスト者も神を信仰しているという意味において楽観的であると言える。そのことをもってキリスト者が悪の問題を過小評価しているとは言えないのと同様に、ホワイトヘッドも悪の問題を過小評価しているとは言えない。ホワイトヘッドが「悪は世界の創造的過程で死滅する」などというリアリティのないビジョンを描いたと理解して満足するのであれば、そもそもホワイトヘッドに取り組むだけ時間の無駄というものであろう。

[30] 『神学の聲』1976-12（第23巻第2号）、聖公会神学院、p.4

[31] 『宗教の形成』、p.42

[32] 『宗教の形成』、p.44

ホワイトヘッドは、しばしば自らの思想が脱構築的に読まれるべきことに注意を促す。

「およそ形而上学体系の欠陥は、それが手際よくまとまった思想の小体系であるという事実そのものであり、そしてそのため、世界についての表現があまりにも単純化されているという点にある。」

これは自らの形而上学を例外にして述べたのではないだろう。最終講義の終わりに、「精妙さは作りもの」と小さな声でつぶやいたという。ホワイトヘッドの哲学を学ぼうとする者は、これを警告として念頭に置くべきであろう。

5. ホワイトヘッドの哲学とプロセス神学の間

○ ホワイトヘッド自身は自らの思想を「プロセス神学」と称したことはない。最初に「プロセス神学」を称し、またその立場を汎在神論 (pan-en-theism)^[34] であると言い表したのはチャールズ・ハーツホーン (1897-2000) である。その土台として使われたのは、カンタベリーのアンセルムス (c.1033-1109) の存在論的な神の存在証明の議論であった。ちなみに、ホワイトヘッドは『宗教の形成』でこの議論は説得力を持たないと論じている。^[35] この点でハーツホーンの「プロセス神学」がホワイトヘッドの哲学とは決定的に断絶していることは注意されるべきであろう。

ハーツホーンが起こしたシカゴ学派の出身ではなくプロセス神学を提唱した最初の一人であるノーマン・ピッテンジャー^[36]は、次のように注意を促した。^[37]

「ホワイトヘッドは宗教的な弁証家ではなかった。彼の著書は、彼がその存在の重要性を確信していた洞察を論証するために特に書かれたものではない。自らの思想のキリスト教に関わる含意を展開することに関心を持つ神学者でもなかった。哲学者になった科学者であった。彼の言うことは常にそのような仕方、哲学の意味と目的についての彼自身の理解に当然払うべき注意をもって、理解されなければならない。」

ホワイトヘッドが論じる「神」は、彼が提起した形而上学の原理から措定される本性を持つ「神」である。

「今ある形においてであれ、あるべき形においてであれ、既存の宗教を参照することなく、冷静に、ここで作り上げた形而上学の原理が神の本性的について要求するものを吟味せねばならない。」^[38]

「時間的世界とそれを形成する要素とは、一切を含む世界を我々に対して構成する。これらの形成的要素は次の如くである。1. 創造性。これにより現実世界は新しいものへの時間的移行という性格を持つ。2. 観念的実在なし形相の領域。これらの実在は、それ自体では現実的でないが、現実的な全てのものの中で、他と関連する度合いに応じて例証される性質のものである。3. 現実的な、しかし、非時間的な実在者。これにより単なる創造性の非制約性は制約的自由へと変容する。この非時間的で現実的な実在が、人々の呼ぶ神である。」^[39]

[33] 最終講義を受けた鶴見俊輔が伝えている。※ <http://gha13102.cocolog-nifty.com/adorno/>

[34] "Panentheism(汎在神論)" という語を考案されたのは、1828年に Karl Christian Friedrich Krause (1781-1832) によってである。世界＝神とする汎神論と異なって、世界が神の中にあるとする汎在神論は、世界と神を存在論的に区別する。この語が広まったのは、ハーツホーンのプロセス神学を通して。なお、ハーツホーンは、神を「人格 (person)」として捉えている。

[35] 「セム族的概念が対決しなければならない主な困難は、次の二つである。その一つは、この宗教概念が神を形而上学的合理化から完全に除外してしまうことである。…この概念の第二の困難は、その論証を得ることにある。ただ一つの可能な証明はアンセルムスによって考案され、デカルトによって再現された「存在論的証明」であるように思われる。この証明によれば、単にこのような実在者の概念そのものが、この実在者の存在を我々に推論させるとされている。大部分の哲学者と神学者は、この証明を否認する。」(p.61-62)

[36] William Norman Pittenger (1905-1997)：ニューヨークのジェネラル神学校で教えた聖公会の司祭、神学者。1966年に引退後は英国に渡ってケンブリッジ大学キングズ・カレッジに属した。ホモセクシュアリティを擁護した最初のキリスト者の一人としても知られる。

[37] "Alfred North Whitehead", Norman Pittenger, 1969, John Knox Press ※ 以下の引用も同書からの訳出。

[38] 『過程と実在』第5部第2章第2節 (522) ※ 試訳

[39] 『宗教の形成』, p.81-82

このホワイトヘッドの哲学で論じられる「神」は、神学で論じられる「神」、キリスト教の信仰者が告白する「神」と、どのような関係に立つと考えられるのだろうか。神学とホワイトヘッドの哲学との間はそもそも架橋が可能なのだろうか。プロセス神学と言っても様々なようであるが、その点についての考え方に注目して、見ていく必要があるだろう。ちなみに、ピッテンジャーは、神学にとってホワイトヘッドの思想がもつ意義について次のように述べている。

「ホワイトヘッドには、神と人の相互的な抱握の概念、世界で起きていることについての開示の概念、ある特定の時、時点が我々の理解にとって“重要性”を持ちうること、実際に持っていることなどがある。また、人間に関する事柄においても宇宙的過程においても愛の中心性を常に強調すること、神の憐れみや神が世界を自己と重ねることについての論及、また有機的ないしは社会的な情動についての主張は、キリスト者の経験がイエス・キリストの“救済の働き”について主張することについて、キリスト者が解釈する道具を与えてくれる。」

「世界が過程的なものであって、動的で、社会的で、有機的であり、格別な重要性を持つ新たな創発的出来事の起こる領域であるからこそ、神が生きており、関係しており、働いており、ある特定の時に開示されると考えられるのである。説得が世界の特徴であるからこそ、“礼拝されるべき神”がまさに愛であると、不条理なしに、特定のキリスト教の出来事に照らして理解されうるのである。」

○ ホワイトヘッドは、あるハーバードの学生に彼の哲学がキリスト教正統信仰と折り合うのか尋ねられて、否定する返答をしたという^[40]。これは伝統的な神学との一致に関する問いに対する答えであったと受け取られている。他方、ホワイトヘッドはリベラルな神学に対しても必ずしも同情的ではなかった。しばしば歴史的信仰の主張を敬虔主義的、道徳主義的な勧告に縮減してしまっていると見ていた。彼は次のように論じている。

「教義的不寛容への反動として、宗教的真理の単純化は、自由化を目指す神学者たちの愛好する一公理であった。しかし、この意見が、どのような明証性に基つかされているかを理解するのは困難である。自然界においては、科学が進歩するにつれ、我々は相互諸関係の一複合性を識別する。そこには主要な諸観念の一種の単純性が存在している。しかし、近代物理学は、一単一的世界を展示するのではない。宗教を少数の単一概念に還元することは、我々の直面する問題の放恣な一解決であると思われる。…このような処置は、時代の環境に応じて、快適な情緒や心地よい行動を生み出すのにもっとも効果的なわずかの観念に宗教を基礎づける結果となる。もし、我々の信頼が、真理識別のための一訓練としての理性の究極的な力に寄せられているとすれば、我々は、そのようなア・プリオリな条件を課する権利を持たない。宗教的教義のあらゆる単純化の試みは、悪の問題という暗礁にぶつかって難破する。」

生起するあらゆるものの分析に不可欠な関わりを持つ普遍的観念の発見を目指すホワイトヘッドの取り組みは、一見すると、宗教を現代諸科学の知見と矛盾することのない合理的に説明できる原理において提示しようとするある種のリベラルな神学ないしは宗教哲学の取り組みと同一線上にあるように思われるかもしれない。実際、プロセス神学はそのようなモチーフを持っているようである。しかし、ホワイトヘッドの仕事は、^{できごと}事実を捉え損なわせる定式化を破壊する批判的企図を基本的なモチーフに持つ点で、むしろ逆向きのベクトルを持つ。彼は「人類の宗教体験に展示された真理」を記述するのに必要な言葉を探求しているのであって、彼が見いだしたア・プリオリな原理を提示しようとしているわけではないのだ。

宗教は、その権威が「宗教の生み出す諸情緒の強烈さによって危険にさらされる」ために、正しい解釈を可能にする言葉を必要とする。ホワイトヘッドが探求する言葉は、その役割を担うことができるべきものである。それが記述的な形而上学である。ホワイトヘッドは、『科学と近代世界』で、デカルトとニュートンの世界像を批判しながら「人類の感官知覚に展示された真理を精密な用語で定式化する試み」である自然科学のドグマを検討したが、次の著書『宗教の形成』では同様に宗教のドグマを検討し、これらの作業を通して「一切を包含する宇宙にとって十全な最も一般的な概念」を探求し、その形而上学を『過程と実在』に結実させたのであった。

[40] <http://www.religion-online.org/showchapter.asp?title=2212&C=1986>

ホワイトヘッドにとって、「人類の宗教体験に展示された真理」を前提して議論することは、歴史を前提して議論することであって、それは「神が啓示した真理」あるいは彼が確信する何らかの宗教的真理を前提することではない。その点で、ホワイトヘッドの形而上学は、神学からは区別される。それが神学の側から見て妥当性を持つものであるのか、キリスト者にとって妥当性を持つものであるのか、という問いは、ホワイトヘッドに即して考えるならば、宗教的経験の吟味に照らしてのみ答えられるべきものである。

「この議論には証拠の性質を持つものはない。…議論の説得力は、宗教的、道徳的直観として大まかに分類されるような意識的経験の中の特殊な要素の解明に全面的に依存するものである。」^[41]

実際のところ、ホワイトヘッドは、この自らの議論の説得力を、かつてのキリスト者としての自らの宗教的経験に照らして測っていたと思われる。「今ある形においてであれ、あるべき形においてであれ、既存の宗教を参照することなく」と言いつつ、しばしばキリスト教の「イメージ」や神学概念との結びつきを示唆するのは、その現れであろう。

ちなみに、ホワイトヘッドの哲学の目には、キリストは次のような姿に映じている。

「伝えられたキリストの言葉は、公式化された思想ではない。それは直接的な洞察の記述である。…彼の言葉は行動であり、概念の調整物ではない。彼はおよそ言語にとって可能な限りの最低限度の抽象を用いて語っている。というよりも、それは言語ではなく、^{できごと}事実そのものなのだ。山上の垂訓や譬え話の中には、^{できごと}事実に関するなんらの論考も存しない。事実は測り知れない無辜で見られている。」^[42]

また、ホワイトヘッドは、自分が形而上学的に記述しようとした真理、神と世界についての考えを、キリストがその生と教えにおいて示したのだと示唆している。

「それは世界の繊細な扱いを要する要素の上に存在し、ゆっくりと静かに愛によって働く。それは、現在における、この世のものではない王国の接近に目的を見いだす。愛は支配せず、不動でもない。またそれは、道徳をあまり気にするものではない。未来に期待するものではなく、この現在にその報いを見いだす。」

ただし、この「つかのま現れたガリラヤのビジョン」はキリスト教世界の歴史に「かすかに」見いだされるだけであって、教会の教えは異なる考えが支配してきたとホワイトヘッドは見えていたのであった。

6. ティリッヒによる「プロセス神学」批判

1933年に米国に亡命したパウル・ティリッヒ(1886-1965)は、『存在への勇氣』(1952)^[43]で、プロセス哲学・プロセス神学を、全体の部分として生きる「勇氣」の民主主義的、体制順応的な型の思想的表現として、批判的に論じている。この型の「存在への勇氣」とは、自らを人類の創造的発展への参与者として肯定する自己肯定である、とされる。アメリカ的「勇氣」においては、存在の力とその意味が現出するのは、生産的行為それ自体においてである。生産に内在する目的とは、生産することそれ自体である。

「元来宗教的な用語である『創造的 (creative)』という語を、キリスト者であると非キリスト者であるとを問わず全てのアメリカ人は、躊躇することなしに人間の生産活動に適用しているが、そのやり方は、アメリカ人が歴史の創造的過程を神的なものと感じていることを示しているのである。そういうものとして歴史の創造的過程 (= 人間の生産的過程) は、その過程に参与しその部分となる勇氣を含んでいるのである。」(p.166)

「死への不安は、二つの仕方であらされる。一つは、死への現実性を、できるかぎり日常生活から遠ざけると

[41] 同上

[42] 『宗教の形成』, p.16 ※この箇所は邦訳は誤っているので、引用は修正したものを載せている。

[43] 頁は平凡社版。ただし、訳は直して引用している。(Yale Univ. Press, p.103-112)

いう仕方である。…もう一つのより重要なやり方は、一般に靈魂不滅 (immortality) と呼ばれているような、死後における生の連続への信仰である。これはキリスト教的な教えではないし、またプラトンの教えとも言えない。キリスト教は復活と永遠の命を語るのであり、プラトンは超時間的な本質存在の領域への靈魂の参与について語るのである。ところが、この近代的な靈魂不滅の観念は生産過程に引き続き参与すること、『終わりなき時間と世界』への永久の参与を意味する。神における永遠の休息ではなく、宇宙の動的過程ダイナミクスに限りなく寄与し続けられるということが、人間に死に直面する勇気を与えるのである。このような希望においては、神はほとんど必要とされない。…生産的過程に参与しその部分となるという存在への勇気にとって決定的なものは、不滅性であって、神の存在ではないのである。もちろんこの場合ある神学者たちが言うように、生産的過程そのものが神となっていると理解することも可能ではある。」(p.168-169)

プロセス神学は、キリスト教の教えとは異質な、人間を資本主義の運動に封じ込めるのに最適化されたイデオロギーとして機能するのではないかと批判的に見る視点を、ティリッヒは与えている。

ホワイトヘッド自身の「過程」に関する思索は、社会の産業化と急激な変化を積極的に反映しようとする様々な進化論／発展論が出てきていた状況にあって、それらを支配し続けている形而上学[44]をその根本において突き崩そうとしたものであった。ティリッヒが指摘するようにアメリカの「勇気」に表現を与える思想として受け取られたのだとしたら、それはドゥルーズが日本でバブル経済期にもてはやされたのに似て、形而上学的な問いの設定の無視によって真逆に誤解されての受容だったのではないだろうか。

だが、事は誤解と見るだけでは片付かないようである。「靈魂不滅」[45]説を、ホワイトヘッドは次のように論じている。

「ここで展開されている教説は、そのような信仰になんらの保証も与えない。この理論は不死の問題、あるいは神以外の純粹に精神的存在者の実在に関しては全く無記的である。」[46](『宗教の形成』)

「全ての出来事は事実性と価値性をもつ。前者において、それらは不可避的に滅びる。後者において、それらは神によってその『歸結性』の内に入れられ、永遠に神に知られるものとなり、銘記され、また世界における善の可能性の増大のため、またそれらの可能性の現実化のために用いられる。少なくともその意味で、『不滅性』は現実である。」(『科学哲学論集』)

「創造の過程に参与するかぎりにおいて、人は神に与るのであり、その参与が不滅性なのである。それゆえ、死後における生についての問いは全く不適切なものということになる。」[47]

この議論は、当人の企図はどうかであれ、死後の生への信仰の素朴な主張は斥けつつも、「宇宙の動的過程への寄与」という観念によって存在への勇気を与えているというティリッヒの指摘を裏打ちしているのではないだろうか。そこにプロセス哲学が米国で歓迎された要因を見ることができそうである。

[44] 例えば、適者生存を説く社会進化論と結びついた民族主義は、「民族」という「本質」を持つ「実体」の観念を中心に置き、その純粹な起源という神話とその純粹な現前の欲望という目的論をもつ形而上学的システムに支配されている。過程の哲学は、このシステム自体を破壊する。

[45] ちなみに、ハーツホーンは、神と分けられる個々の靈魂の不滅性を否定し、各々の人間の生において創造された全ての美が神の現実の中で永遠に存在することになると説明した。

[46] 『宗教の形成』, p.100

[47] "Dialogues of Alfred North Whitehead, recorded by Lucien Price", 1954, pp. 296-7. ※これは、ホワイトヘッドが記した言葉ではなく、会話の中で語った言葉を、友人のプライスが記したものである。